

思い出の中の保育 (3)

守永 英子

昨年の春、昔、担任をしたクラスの、クラス会があった。もう社会人になって、数年経つ人たちである。このクラスは、製作活動を得意とする子どもたちが何人もいて、思い出深い。

当時は、○○遊び、○○ごっこ、といったような、いろいろな面の活動を含めた総合的な活動が盛んであった。“動物園”“お店屋さ

ん”“釣り堀”“お祭り”など、保育者の誘導でクラス全体が盛り上がり、他の組の子どもたちも、お客さんになって、園全体が賑わった。

クラス会をしたこのクラスが、“おもちゃやさん”をしたのは、四歳児クラスの時であったが、全園児がお客さまとして買いにこられるほどの、おもちゃを作ったのだから、



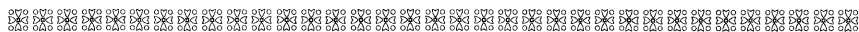
今思えば大変なことであつた。沢山出来上がつたおもちゃの中で、忘れられないのは、Sくんの作つた“自転車”である。小さな、アメの空箱と針金で作られた自転車は、とてもよく出来ていて、私は、思わず教頭の菊池フジノ先生に、お見せした。先生は、「こんなに、よく作る子どもは、珍しいですよ。記録をとっておくといひですよ。」と、おっしゃつて、くださった。

このようなクラスであつたから、共同製作で“はり絵”をしたり、お魚を沢山作つて“魚つり遊び”をしたり、数人のグループになつて、大きな鯉のぼりを作つたり、製作活動は盛んであつた。また、自然な遊びの中から、いろいろと“ごっこ遊び”も生まれ、観客席をつくつて、人形芝居をして見せるなど、よく遊んだ。

このころは、園としても研究活動が盛ん

で、一年に一度、實際指導研究会といひて、全国から集まる先生方の前で保育をする機会があつた。参加者数が多いために、場所は大学講堂で、保育は講堂の壇上で、という不自然な形をとらざるを得なかつたので、保育する身にとつては、かなりの負担であつたが、唯一、このクラスの年長組のときの研究会だけは、子どもと自分が一体になれたような感じで思ひ出し、心が弾む。

製作活動は盛んなクラスであつたから、大きなダンボールの箱での共同製作がよいのではないかと考え、“遊園地”を作ることを提案してみると、子どもたちは、大變にのつて、次々に遊園地にあるものを考えてくれたが、その中で、子どもの希望によつて、自動車、飛行機、汽車、ボート、メリーゴーラウンド、釣り堀、劇場、食堂などを作ることになつた。そのほか、大積木で、すべり台、

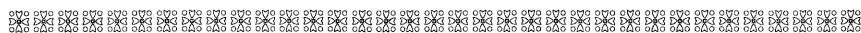


▼ ひこうき



シーソー、馬、ベンチなども作ろう、と子どもたちは、大変積極的に、ボートなども、私が予想していたオールつきだけでなく、モーターボートを作るといって、後ろに針金を使ってスクリューをつけたりしたほどであった。

子どもたちの活動力に支えられて、遊ぶ過程も、あまり苦労した記憶はなく、男の子が二・三人、保育室の出窓の前の石だたみに、大きく広げた新聞紙の上で、ボートを



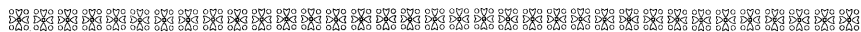
▼ メリーゴーラウンド



絵の具で塗っている姿などが、今でも楽しく目に浮かぶ。

少し悩んだことといえば、子どもたちが選んだメリーゴーラウンドを、どのような形にするかということであった。私が、子どもた

ちに悩みをぶつけて、一日か二日経ったとき、U子が、私の悩みに応えてくれた。木を十字に組んで、一方に馬の頭をつけ、またがって乗るようにしたらどうだろうか、というのである。私も賛成して、その方向で考え



をすすめることにし、紙袋につめものをして耳をつけ顔をかいて頭にし、反対側にしっぽをつけるようにした。玉入れのボールを軸にして、そのまわりをまわるように、縄でしつらえ、お客さまの人数に合わせて、乗る馬の

数を増減できるように、取りはずし可能にした。そしてメリーゴーラウンドの曲をレコードで流し、曲に合わせて、自分で膝を屈伸させて、メリーゴーラウンドに乗った気分を出すのである。

▼ つりぼり



劇場は、ペープサートにし、出しものは、
“金の好きな王様”になった。裏返すと金一
色になるのが気に入って、皆大乗り気で、自
分たちで何度も練習し、全く苦勞がなかつ
た。

研究会当日も、今までの活動の一連の流れ
として、子どもたちは積極的に動いてくれ
たし、私は、このクラスの保育を見せる一時間
という枠の中で、予定の活動が行われるよう
に配慮すればよかった。

後日、園の遊戯室で、遊園地遊びを展開
し、他のクラスを招待して、子どもたちは、
もう一度楽しむことができた。

私にとっても楽しかった思い出の中の保育
であるが、現在の子どもたちの中に、このよ
うな活動を持ちこみたいとは思わない。子ど

もたちにとつての、幼稚園の生活の意味が、
以前とは違ってきていると思われるからであ
る。“子どもが変わってきた”と思う。どこ
が変わってきたのか……。何か大きな力が押
し寄せて、母親たちを不安と焦燥に駆り立
て、それを受けて、子どもはいらだち、自
分を取り戻そうとあがいているのであろう
か。

子どもとおとなが心を通わせながら、問題
に取り組んでいこうとするゆとりもなく、お
となが、ひたすら子どもを受け入れること
で、子どもの健全さを回復させていくこと
が、保育の大きな課題になっているように感
じられる昨今である。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)